

私たちは、「四万十リバーマスター」です！＝源流域から河口域まで＝

清流通信読者の皆様、こんにちは。今回は四万十川の達人たち、『四万十リバーマスター』の方々の活動についてご紹介します。

四万十市 西土佐 岩間の景観



“日本最後の清流”、四万十川

数々の生き物たちを育み、人々の生活を潤し続けてきた豊かな川『四万十川』。

津野町^{いらすやま}不入山(1336m)の東斜面に始まる流れは、多くの支流を集めながら 196km を旅して、やがては太平洋へと注ぐ。源流域から河口域までのバリエーション豊かな景観は、“日本の原風景”とも表現され、川と共に暮らしてきた人々の息づかいをも感じるといふ懐かしい佇まいが、今なお人々の日常と共にそこにはある。

日本の一般的な川が滝のように直線的で急流であるのに対し、四万十川は大きな蛇行を繰り返しながら山あいを進み、300 以上もの支流を集めて、ゆっくりゆっくりと流れていく。しかし、流域面積に比べ幹川流路が長く、そのため河床勾配が非常に緩やかであるというこの性質が、四万十川の運命を決めたとも言われている。

勾配が緩いためにダム建設が容易ではなかったこと、遅い流速故に初心者のカヌーなど川遊びに好適な場所となったこと、その一方で、この穏やかな流れにより、四万十川は生活排水やにがりなどの汚濁に対し非常に弱い体質になってしまったこと。穏やかな流れを生む緩やかなその勾配は、四万十川の長所にも短所にもつながっているようだ。

四万十川は、1983 年の NHK 特集『土佐四万十川～清流と魚と人と～』のなかで、“日本最後の清流”と紹介されたことをきっかけに、全国にその名が知られるようになった。

今では、日本を代表する“清流”というイメージが定着してきているのだが、近年の国土交通省の全国一級河川水質調査を見る限りに於いては、特に水質が良いというわけではない。水質がよい清流ということであれば、同じ高知県にあって“奇跡の清流”と呼ばれる『仁淀川』の方がずっと清流らしいという声も、最近は多く聞かれることも事実だ。

ではなぜ、四万十川が“清流”として、こうしてたくさんの人々を惹き付けて止まないのか。

そして、この“清流”は、偶然に残ってきたのだろうか。

今回は、四万十川に関わる人々の中でも、日常的に四万十川の近くで生活する“四万十リバーマスター”の方々の活動から、四万十川の魅力について考えてみたい。

四万十川を後世に伝える取組

四万十川清流保全の取組は、高度経済成長期のダム開発に反対する住民運動からといわれている。

ご存じのように、四万十川本流にダムは存在しない。河床勾配が緩い四万十川では、大型ダムを造るとなると水没面積が大きくなり、広範囲に影響が及ぶのだという。

しかしながら、日本で多くのダムが建設された高度成長期には、ここ四万十川流域でも3つの大型ダム計画（渡川ダム S25、大正ダム S37、梶原ダム S44）があったようだ。

しかしいずれも、住民の反対運動により建設が阻止されている。そこからは、四万十川と共に生きてきた人々の、この川に対する熱い想いを感じとることができる。

また、四万十川流域の森林面積は総面積の8割以上をも占めている。

森林は、水資源涵養機能や土砂防止機能に着目すれば、コンクリートのダムに対して『緑のダム』と言われるとおり、四万十川流域の豊かな山々が、この清流を育んできたと言っても過言ではないだろう。

しかしここ100年ほどで、上流域の自然林が急速に人口植林に変わっていった。その上、その後の林業不振や過疎・高齢化等により、この人工林は放置され、荒廃し、流域の山々の貯水機能が著しく衰えてきていた。手付かずの自然を誇っていた四万十川流域も、徐々にその姿を変えつつあり、それに伴い水質汚染も進んできていた。

しかし、そのNHK特集番組を機に四万十川が全国的に有名になったことで、多くの人々が流域を訪れるようになる。そしてそのことをきっかけに、県や地域からも、四万十川の価値を再認識する動きが出てくる。

そうした背景のもと、1989年に高知県清流保全条例が制定され、91年には四万十川清流保全計画が策定、保全の動きは主として水質浄化の面から始まっていったようだ。

1994年には、四万十川を流域共通の財産として後世に引き継ぐため、流域8市町村（現5市町、四万十市・四万十町・中土佐町・津野町・梶原町）が一体となり四万十川の清流保全に取り組み、『四万十川総合保全機構』が発足。翌年、高知県は四万十川流域の様々な課題に対応するため、県庁内に「四万十川」という河川名を冠した全国初の組織『四万十川対策室』を設置した。そして2000年には、行政や民間団体と連携・協働し、四万十川の保全と流域の振興を目的とする（財）四万十川財団も設立され、その後の四万十川保全の取組が大きく進み始めたのだ。

四万十川の達人たち “四万十リバーマスター”

このように、四万十川が“日本最後の清流”と呼ばれるようになってから、毎年多くの観光客・レジャー客が流域を訪れるようになってはきたが、一方で、水難事故の多発や、観光客が環境保全や安全確保のための具体的情報を得る機会が少ないなどの、新たな課題・問題が生じてきていた。

そこで高知県は、そうした問題を解決するために、『河川を利用する人に知ってもらいたい情報・訪れた方が知りたい情報を提供する、また必要に応じて注意喚起する体制』を作ることにしたのだ。

2001年の秋、四万十川流域でこの川に直接関わっている、個人・団体を『四万十リバーマスター』として高知県が選任し、その育成と活動が開始された。

四万十リバーマスターとは、端的に言えば“四万十川の達人”で、『四万十川と向かい合い、生活の知恵として四万十川の環境保全や魅力を身に付けた人』ということだが、具体的には、①四万十川及びこれを取りまく自然に配慮するマナー、②河川利用時の安全確保、③生活者優先などの四万十川利用ルール、④観光客の参考となる道路情報や観光情報等を河川利用者・観光客に提供し、必要に応じた注意喚起を行うことが、その任務となっている。

現在は、源流から河口域まで、様々な立場や職業を持つ88名の四万十リバーマスターの方々が、ボランティアでの活動を展開している。

彼らは、日常的に四万十川の最も近くにて、今現在の川の様子や保全のためにすべきことなどが、一番よくわかり得る存在だ。

だから、年一回開催される『四万十リバーマスター連絡会』でも、常に話題に上るのは、『清流を守るためにはどうすべきなのだろうか』ということ。



四万十川源流点（津野町不入山）



神在居の棚田景観（梶原町）



最上流の高樋沈下橋（中土佐町）



中流域の蛇行（四万十町十和）



河口域（四万十市下田）

“清流”が“清流”であり続けるために、四万十川を後世につなぐために。

先日、10/29～31 の間で開催された“四万十リバーマスター連絡会”でも、様々な意見が出たのだが、その中で3人の方々のこの川に対する想いをここに紹介したい。



(1) 津野町で源流点ガイドなども務めるリバーマスターの熊田光男さんは、四万十リバーマスターの任務についてこう話す。

「四万十川に来られた方にいつも私がお話しするのは、“日本最後の清流”という意味についてです。“清流”とは、水質の良さもさることながら、そこに豊かな生態系があり自然が保たれ、住んでいる人たちが密接に関係して生活する川のことだと思っています。言うなれば『生きた川』とでも言いますか、四万十川はそういう川なのです。

残念ながら、近年水質汚染が進んできて、そういう意味ではかつての“清流”ではなくなりつつあるのかもしれない。しかし、未だ多くの生き物が生息し豊かな生態系があり、そして何より流域では多くの人々がこの川と共に生きている『特別な川』なのです。

だから、この豊かな川を取り戻し、ずっと後世につないでいきたい、そういう想いが流域に住む人々やこの川に関わる多くの人達に共通してあるのだと思います。訪れる方々にそういうお話をしたら、皆さん納得してくださる。私たちの活動する意味も理解してくださるようで、環境保全の動きがここから少しでも広まっていけばと思います。」

(2) 下流域でカヌーインストラクターをする佐藤幸代さん。

東京出身の佐藤さんが、四万十川に魅せられて、ご主人と共に四万十川のほとりに移り住んで『四万十川ユースホステル』を始めたのは20年ほど前のこと。

「私たちも、とても四万十川を愛しています。だから四万十川の魅力をもっと伝えたい。そしてこの川のファンがもっともっと増えてくれることを願っています。だからこそ、川と良い関係になれるようにルールやマナーも守ってほしいのです。」

(3) 下流～河口域で川漁師をするリバーマスターの山崎清実さん。

三代続く専業川漁師の家に生まれ、四万十川と共にずっと生きてきた。

「川の魅力というのは、人と川との関わりの中にあると思うのです。だから、四万十川には今でも“川から恩恵を受け生活する人”がたくさんいるというそのことが、清流を保っている上では大きいのではないのでしょうか。このことが四万十川の魅力になっていると思うから、そういう川であり続けられるよう、恩恵を受ける自分たち自身が守っていかなければならないと思うのです。」



日本の川の多くが、ダム建設や護岸工事などで次々とその姿を変えていったとき、人々が力を合わせて、懸命にその“清流”を守ってきた、最後の砦『四万十川』。

四万十川を“日本最後の清流”と呼ぶのは、この川に関わる人達全員の『決意』のようなものではないのだろうか。

そして、矛盾した言い方かもしれないが、彼らは、四万十川が本当に“日本最後の清流”となってしまうためにも、『四万十リバーマスター』としてこの川から発信し、この川の流域で日々活動をしているのではないかと、私にはそのように思われるのだ。

(取材/記事: 矢野由美子)

参考文献:

依光良三編著、流域の環境保護―森・川・海の人々―、日本経済評論社、2001年
高知県環境共生課四万十川のページ : <http://www.pref.kochi.lg.jp/~shimanto/>



リバーマスターの一次救急救命講習会



連絡会では四万十川の今が語られる



四万十リバーマスター: 熊田光男さん



活動中のリバーマスター: 佐藤幸代さん



四万十リバーマスター: 山崎清実さん

